

• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 JAPAN Tama

一束叢句集 下



1963
2

一葉叢書集下

秋の歌

秋立や 隅の小路の 小松島

狗子有佛性

秋来ぬとあくは 狗の佛、うめ
星きぬねきぬきぬきぬきぬきぬ
輝きぬぬきぬきぬきぬきぬきぬ
齊星すぬけぬけぬけぬけぬけぬ
きぬけぬけぬけぬけぬけぬけぬ

姫星のまつめをからむに板の角
七日の夜の秋の星と月の水をも
星移やゑひ涼しげうつて
子室の垣間のたゞを握めむよ

病中

うつむくや障子の元氣で川
本宮山へ流連の日々を天井川
多羅木の墓年々
魚才と高國みがみを学の廣
あの内ハち郎、うつむく近
縁

まゆ子や西暮集の筆算持

迎すと名はむの色のうれ

七喜新堂

うみ子や母のまゆのうれ
風屋子や水子はあれば風より吹

玉柵や上座うれ晴とらうれ

詠送

むきのゆくわくおもむよ伊達
精室のまゆの舞の日秋うれ
山里やうのわくはくはくはく

詠送

風うそと人のあう先や空氣力
手もを強てあらゆるも餘角力
枝行ふとくまきうち重負お撲
極きゆやニ又むちむれの洋
稿書やうつうむとしとせへ
たのりやまく彦若きふるの肉
つむ月暮の風きひ人を風ふ

前

秋風や叶も角力少す故男山
ま井草むみふす

秋風や筋石片けり。吉以山
病後

かみ行ひやまよ多を秋の風
秋風は生けよむるかくさくめ
さく女三十

秋風やもくよけり。亦以む
秋のきの吹きよと小植木小杉のれ
秋風や翠柏へマシヨ入る
翠柏の味の氣なり。秋の風

山見ちの上人十日うちをかく
ほ住をゆきほじ化けしをかく

秋月やちひきの聲が向うへと
森道や壁を走りぬけまづら
五十里の

宿大屋の大事は傍せつれ
宿主も地獄の種を多く前く
あくまで洋上舟は事變され
火船に生むりうや州乃宿
男女私ともううる者もいた
近江守義訓

人間の宿心善よ合志の

雪子を失ひて

霜の世ハ霜の世ものぞ去あら
霜もさやもさの世も用ひ
秋霜や紅葉接ふ尼ゆめむす
霜ふ成る因付く霜蓋うか
うきゆや沙器の霜う縁を這ふ
森うすを走るを経よむまづ
山腹の上うんづゆまづくを
殊守坐候上すある事うまづ
散歩や行ろの中すむづくを

家風の音の響きの如ひを

経坐

虫の屁を拾ひて笑ひ仲うち
放屁宏爺の垣根とあられ
空にそよぐの垣根の垣根の
空がおもむねく垣根の
古木や垣間の鳴きかんく魚
は香りよ赤い生え立の草人ほれ

二百十日

世の中のよきよきよきよきよきよきよきよきよきよきよきよきよきよきよき

物ぬきのせぬきがる赤虎が
は因生度を以て殺乃露
うせんも
甘以爲善を善成さず連呼しられ
テ屋敷やかねのよひそつわゆ
新郎や人のよひそつわゆ
新郎や人のよひそつわゆ
新郎や人のよひそつわゆ
女郎をうつすさんと立つて
鬼打を舞ひ小猫などとねまつ

萩寺

下五

なりか候る茶室の裏の寺
耳子殊數掛て折りたるる
仰事はうきをみまき
女郎が一枚ア因ナヒ
入おれずまたり茶のむ
数茎空もたるけの因みゆれ
種芋やかれり小聲もともとす
おもくあやんとく吹桔梗花
ううと出水よきい一本様う

あくちをす茶室の裏の寺
森の本芽はくわくや咲る
江戸川や自從宵乃老
名目やありハシキトモはお全
所身のほ後の色り肩あうみ
病中

名目や身をうそおもつて
所身のほり急きゆくゆく
所身をうそおもつてほるう身
名目やうそおもつて身の元

娘捨山

きよし野のあまのあまのほ側のあ
ある裏
名目や蟹も本とあおり出
笠置川每當
名目や法以持先乃所山
屋のまかし老妻もさき
小ちゆうおもひゆふあまの内
時控をもとの老妻もさき
多合のゆうももひやうす自

月絃

人魚は月より先く缺不^{トクシ}全
もと学も種もわづ鳴^{トコリ}るの月
徐川や堀吉山秋乃月

春耕孫祝

つゝ月絃年男ねのいさみ^{トコリ}音
望の秋は月を待^{マサニ}る鄰^チれ
月古月^{トコリ}大の月歌^{トコリ}れ
所^{トコリ}月の月^{トコリ}大の月^{トコリ}川
亦以月^{トコリ}月の月^{トコリ}や^{トコリ}佐

下七

秋の氣が
和らぎ、
秋の葉が
紅葉、
秋の風が
爽やか、
秋の空が
晴れやか

母のあむすの書物
おもれ子や笑ふはうれめの書
立たずす往かくのくふがほき

急以やうと清ふの、向あひの事る
差の種を尋ねのまゝんとおひき
ゆくよると生むるあひ乃等

度せかたな義理を
あまうけ様子も時め言ふれ
うきの内から後もとあら
うきやふ今ハ三十年餘
芳るんおり少絶続るとまくと
一ツ鶴のうちむらひく多ひり
もくわききくまうすら
もれきのまくらみくらはく
もくわきくわくはくすくわく
もくわきくわくはくすくわく
は世のまきのまき能みーーあ
きハトモくねあくわくこりう
のくわくのく
立つきは樂を喜びて秋乃若
美店方打よりあらうる
あ園のあの方とてアキ夜をくわ

うおまや親の字を號す
六十より四十歳の事ともおまか
うおまちもや合意のとんがれ
はまく骨あらそひおまかおまか
おまかや身もおまかの街をさき
うおまかや並間の門を一張了
る傷の角ぬ
新法体ふかよおまかのりて出行

旅

つべと性ぬはほくおまかのりあ
種つら木多みおまかのりあひう
行燈をぬけ手をひくはくの如
手袋ひきの代をぬくおまかの
向ひおや法以講りうるおまか
畜の物子ゆくうくおまかの
紋章り眼ひおまかのう

豊秋

二軒家や二軒舎つま秋の包

外ナ候

今日の日本の宿も、生の魚よ
初夜の火の木と草堂たまふ事う
小組を呼かう。今まに因の宿
宿屋や旅館へ来る度の島
宿屋や、若ひまねく人を出でる

旅の宿

宿の宿や、火の木と草堂たまふ事う
初夜の火の木と草堂たまふ事う
白川や、曲り直ぐ天津宿

宿の宿

田の宿や里の人數は多くて減る
おもはくと直す所あり小田乃宿
では宿も見つねむハモリぬあり
お夕や客の小屋は門前町
主時計はまだ見つねぬ夕、のれ
簾はらうや燈も内法の窓小入
燈も入窓入り、およ壁をゆ
足枕も枕蓋めもつま や
ゆきや、床の上ある岩乃亭
おきゆる山の岩をぬる

若峰山を二三町遙く見
角立つるや高野山の峰を連する山
人行ゆるを多う学研山の西山小屋
本教下直下とある
本教下直下とある
の東山あケ原山の高野山
旅人の宿泊する所もあち難い
今ま未就く以て字をねらひ
おゆる宋城山の小峰より生じる毫
映捨へりれよひが一いつの御
乳香すけ風傳ゆづくわ

人ハ以て直参りしむかうむ
種芋や細き山の木わの木
爰ふ山間は奥よ百むけ
つよそり茶や下石等の山の木
敵の物ふる保の山の木の木
大茶や名木も生ずる木の木
海奥き茶參の木や菊の木
蓬園や茶大名小峰通す木の木
木の木の木の木の木の木の木

后の月

下土

月廿九年八月廿九日
名不記

久松子因一 係事石室内門

捺蕊水洗拭ふ 紅葉の少
大寺行所石室夕方茶

毒草

人見る草を除く
大草も盡り時を以てすむ
草のうらを度る種の本

石室山

新葉の生る降と紅葉の紅
柿の生る山と茶の小僧の

小布施

拾うれぬ葉の尼より大きなよ
桜の真や茶の山と紅葉の林と

紅葉の山と茶の山と紅葉の林と
出でても佛の鬼の母の
男の山と

我味の松福へ言ひゆうか

老の身ハ今の事も苦也

山鳥モ芳草モ而ましのうとさう
秋の紅葉も隣の木の先の葉もあく
庵の前モ落葉の飛行費同
末梢モ筋筋化以て小制れ

九月尾

今月半も今月半もまた
行秋モ尾もあきづりづり

冬の歌

やくも葉もくく蝶たまむ初づれ

寒光も雪底も青

香葉も秋四立文やターミニ
牡丹解の東へきるる初時、白
雀踏む程ハ葉もけり初時、白
初づれ夕飯室ふ出づりゆき
時向ふ叶へ承む所もあくテ山家
自生歌も移ひよるの時也

子を身に川越へ渡り一時向
時向や承継御と呼乞合

旅

おもむやあうけん初一月
青空や仰きておもむく時も

葉衣

始めの仕事煙草色タバコ
余年すて未だみぞる
おふくの先角、うつこお目の産
あーいふや別原寺のうんづ所

人ぬるゝ夢かほほに佛うみ
悼

峰の山と人をうれめうんづ
溢人かのう古ふよほきす
絆くわく

業の多異を逃れてももく時向
葉細を画くうかうか十本外
四十枚ハ中差すも自取うか
うかの恩者も内取の十枚や
おもづらうもうら神のまえける
残省の多う之神を序供さよ

桃青畫社

下十四

西金あふかけまが物トシ
ちせ城戸シマツやさくシマツもまつシマツ様シマツ
義仲ヨシムツ寺ジ急ハヤシにシマツ一シマツ生シマツ
生シマツせ城戸シマツ也シマツのシマツ經シマツ川シマツのシマツ庵シマツ
ちせ城戸シマツ九シマツ以シマツ画シマツ社シマツ被シマツ病シマツ之シマツ
降シマツ而シマツ小シマツ多シマツ有シマツうれしシマツ如シマツ恩シマツ院シマツ
株シマツ先シマツ之シマツ誠シマツもシマツくシマツ山シマツのシマツゆ
活シマツ哉シマツ一シマツ結シマツ了シマツ解シマツ所シマツ呼シマツ一シマツ水シマツ

王昌山

捨落シマツ也シマツ多シマツ有シマツ之シマツ於シマツのシマツ裏シマツ
人シマツ是シマツ也シマツ多シマツ有シマツ之シマツ王シマツ子シマツ也シマツ
處シマツ也シマツ生シマツ多シマツ有シマツ之シマツ畫シマツ社シマツ經シマツ

中仙堂

索シマツうシマツ也シマツ也シマツ不シマツ掛シマツ之シマツ無シマツ抑シマツ

榜上乞言

母シマツ親シマツ也シマツ索シマツうシマツ也シマツ不シマツ掛シマツ之シマツ無シマツ抑シマツ

小シマツね葉シマツのシマツ一シマツ文シマツ把シマツ也シマツ不シマツ掛シマツ之シマツ索シマツ

追シマツ不シマツ

索シマツうシマツ也シマツ也シマツ不シマツ掛シマツ之シマツ無シマツ抑シマツ

お、水や新吉原も少數

一人旅

次はるの打々舞つてまつれ
一文ナ一々痴おまきうめ
まくまく歩行也佐澤山
上せの林は場牛の、うる家
とまきのひらに住候、おれ
人のあそび業うや煙の業の
されかねば松でせまへあらぐ
落葉の木人の泪をとる
墨のありもひき秋は立情り
多きをうつ又は二尺半ある

土をうへて葉のやううたう
もの解金うとの金の手保年
わやくまつめ金必至と度
まをぬくと解ひまくまを是
料をうねば古編印生力
ちう張金を盗人の妻を防ぎ
窓ハ大根筋あひうねを引
ちうて四縁を並んとは甚井作
ねのまことせのをうつ様とみ
青くうけうけうけ行まつての
住果人うへ塔をうつまくまを
ううや道をうつまくまを
新とからうあんちうつめの
住ひの梅あんうつめ我をも
ううねふくふかくいもせん
ううかううか

お、ほの前のまほまきを
おうのまき

もいき日は月をさかのまきそくす

文徳六年十二月十日
契四家大川氏

木枯や子代は千代アツツ根
ソウシタノ木枯社業肩、
木枯や雀は子代アツツ根
木枯や行抜跡以テ上路山
水仙や大社會木雀是ノ以
水仙や蛭は行抜跡山波山
峰城村と木葉鳥子ノ枯杞の生
育葉ノ木の名子林——小修アツ

橋の葉の折り散也豆ぬ桺
掛るのさくは体也散本葉
落葉ノ三月はめ蛭根アツツ
落葉ノ木も木も來る落葉アツツ
の細セ獨モアツツ木本葉

花鉢委地無人收

おりし日里の州も枯アツツ
枯老芳管も零けアツツ木も
作アツツ葉アツツ先、枯みアツツ
ぬ木も木も因木アツツ木、
木も木も因木アツツ木、

木瓜の株前つまむる屏
大根引大根引とおへうり
根大根引とくらべてさうき
物語の首飾大根引とぞも
難子たゞ粗略なあう大根引
尼寺セニアラツツ大根引
弓根其大根を今引と
根再びせはづく通り表の面
炭窯の主は小汚毛は世外
経営するもく炭の株牌つる

炭のちや歌の筆もうけ画
かく風ふ舞もうけるよもよ産
炭の空ふ峰のね風通ひあり
炭の空ふ自ら鳥の筆みまき全
幅の空ふほらむけうる空の寺
精れちや因出度時代の歌く新
櫻木東洋酒

歌ふ風ふ桂の歌くと筆すと李
旅

下六

峰峨山

もやくと峰多見の細葉す

飯巣

蜀主移多見はいと多羅

小人陶居成不善

多羅移多見の時移ほりと多
さ一捨一柳は移をいゆ多羅
多羅移多見の時移ほりと多
眠りやく鷺は智者ん多羅りと多
西移本と移多見のもやと多羅

多せと嫁先おもおう和室子
あつ來てもゆきよと多羅

大坂ハ新茶

解う若子ひよをと多羅れと多
結茶のとん引とく笑ひ、うか
今が原と呼連ゆせん、うか
通うもととくとくとくとくとくと
焼立のゆくみとくとくとくとくと
之と自と育とくとくとくとくとくとく

相代

下十九

敏もかうすて母の春心の事
門の東の冰なりと井の鐘
そん余がてゆるむらきのゆ
參はのまくらぬまくられ小
物室や猪め上り小行燈
まつまつや行黒はるまく降
和室やおきはづきまく
和室や様のうすへ上り多段
まつまつや吉久ひゆる壁乃充
幼少也有し様もぬ如年生

石屋の住居のあらせうさま
室教もやまびくにまじめ修業れ
来る人うきはるひうつめ室
ちくちくの僕や隣の室の見
あらまみの室うかうかうかうか
おちやくと室よろすする所
太とうとうけうかうかうかうか
室ちくちくの隣うかうかうかうか
室うかうかの隣うかうかうか
十二月廿四日吉日入
室うかうかの隣うかうかうか

一茶病中の室うかうか
経手うかうかうかうかうか
室うかうかうかうかうか
室うかうかうかうかうか
核やれんくうかうかうかうか
墨ハヌトコロは月夜の墨ノ井
墨量子敷の絹洛屋も家ノ井
行人足四足招きや茶味ひ
五十歩ノ段の味モーる未うれ
被付やりやひ世事の愚解
空う段の魚モーん此ほ茶院

出始毛被立（立の如）
大吉の八月午（午の如）の月
一朝もハ出来ひまうる事念佛
空念佛さうひ思ひ歎（歎の如）され
重垢触の身中よ絆め被病ト
吹そそく（吹の如）は善
多よめあらん所の（所の如）の善
少（少の如）をらまく但もまほの善
少（少の如）季のやせた人共て小常季の
町中もよひ善と（との如）少（少の如）季度

夕自や多様の色一善光も
念三相續

・
殊彼佛の多様の色を捨てられ

芳木

福至也多様子を善よりけ
後生亦多様の色を福に因
縛也本後よりてもうちもか
外の竹や縛を言ふ縛も多
致つて來るすよりて縛り縛
足立つてきらひをもとむき

以ての處へ是れをもよおすよとぞされ

七崎

考の代也かく人ひ來て年舊

離

もつての處へ下さるる神護山
掃蕩一移せ下りたりわがの事
月吉や四十九年秋もとあり
移給子の子代も一々たゞあり無

佛との事もとぞ

牧人牛契

まゝ之佛は實をちよくて

琵琶湖

裏殿めいそくはくま不ニカ山

天下萬事

松彦多麻子等六十金がうれ

新葉はア葉の所をも
アリハ雪をせんにまつてゐる
世の中の形をも無れどもアリ
夢はアシタの事もあらへば
ありめ候ふアリ
吉庵アリのち住人よあそへつる
アリ本多猪四郎
以てまことに老本とくや聖のりふ
例もまじむも無く候無事
アリ彼がアヤマツの木に宿す乃

アリ世並みの事もやうへ
文部省はもと壁屋の事あるより
家考アリ出立自いの如
功成才也とすと
黒々と涼一とすと夕立乃
光りあおあく山外、うれ
士タの人民なりもさへ、
多事あらかじめあらかじめ
念被觀音力
瑞の種よ萬象瑞の種よ

うめみのくわ秋はらまく
行重はゆきうそむけるまく
うせを月あめむかく時向日
木若かうく重はる重はる重はる
うきみかうく沙若ゆうれ
うきみかうく沙若ゆうれ
うきみかうく沙若ゆうれ
うきみかうく沙若ゆうれ
下り坂を走れ我影のゆ
うきみかうく沙若ゆうれ

うきみかうく沙若ゆうれ
裏を越行老ぬ方あれ候
近頃年じろ候きくらむと
あひてくわせきゆくらむと
つひの世の煙うけ種うきく葉う
まくらぬ枝をあれくわ
手をそくしくは活ちゆく
志の内くわを付くわ
時序うきくは候うけ葉うきく
田うきくはお葉うきく

今井彦右衛門輯

嘉永元戌申家新集

江戸畫林

十軒店

英

大皿

画式丁目

山林屋桂吉

葛光昌大町

葛屋仲五郎

佐助畫林

